

地域情報（県別）

クリニックをカフェのように改装し、地域の交流スペースに－田那村内科小児科医院の田那村雅子副院長に聞く◆Vol.1

2019年3月6日（水）配信 m3.com地域版

色とりどりのソファに、丸テーブルとクッションが置かれた小上がり。健康関連の本がずらりと並び、パソコンもある。「田那村内科小児科医院」（千葉市中央区）の3階はまるでカフェのような雰囲気だ。待合スペースとしてだけでなく、地域の人が出会い、交流する場所にもなりつつあるという。企画した田那村雅子副院長に聞いた。

（2019年2月4日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

――まずはクリニックの成り立ちについてお聞かせください。

当院は、私の夫の母が1961年に立ち上げた診療所で、開院当時は義母の専門である小児科のみを標榜していました。後に、夫の父が勤めていた大学病院を辞めて診療に加わり、内科と小児科を掲げるようになったと聞いています。夫（現院長）と私に代替わりしたのは2001年です。開院当時は住居一体型の木造2階建てでしたが、老朽化に伴い、継承した前年の2000年に建て替えました。現在は鉄筋造りの3階建てで、1階と2階を診療や待合スペースに、3階（83㎡）を感染していない患者さん専用の待合スペースや地域に向けた交流スペースとして活用しています。



田那村雅子副院長

――3階を地域向けに活用しているとのことですが、具体的な用途は？

地域の方に向けた使い方としては2つあって、まず1つがスポーツクラブ「セントラルスポーツ」と協力して行っている健康教室です。同クラブのインストラクターによる専門的な指導が受けられるもので、（1）母と赤ちゃんがスキンシップを図ったり各々の体をほぐす体操を行ったりする「ママ&ベビーエクササイズ」、（2）3歳から小学校低学年までの子どもが跳び箱やフラフープなどを使って体づくりに取り組む「キッズ体育教室」、（3）ご高齢の方向けの「ロコモティブ・シンドローム改善教室」――の3つのクラスがあります。1回の参加費は864円で、各教室を月に1度開いています。

また、「みんなのカフェ」と題した交流会を、毎月第2土曜日の午後2時から4時まで無料で開いています。琴や管弦楽団の演奏会や落語などのイベントを開くこともあれば、企画なしにざっくばらんに地域の方と私を含めた当院のスタッフが雑談を交わすこともあります。3階には2部屋あって、患者さんの待合スペースやみんなのカフェのために使う部屋、健康教室に使う部屋を分けています。

――珍しい取り組みですが、建て替えの時点からこういった構想を描いていたのですか？

正直に言うと、余ったスペースをどう活用しようかと考える中で出たアイデアです。建て替えにかかる費用は決して小さなものではありませんでしたから、最初は家賃収入を得るために3階をテナントにして、他の医療機関に入っただけはないかと考えました。しかし、マッチングしなかったんです。複数の医療機関から問い合わせはありましたが、当時、当院は院内処方を行っていて近くに調剤薬局がありませんでした。問い合わせる側としては、「ビルの中に内科があるから薬局もあるだろう」と思いますよね。こうした理由で折り合わず、借手がつかなかったわけです。



地域向けの交流スペースに活用しているクリニック3階

——それで、法人としての活用を考えた。

はい。患者さんの待合スペースや地域の交流スペースとして活用を始めたのが2004年ごろからです。代替わりして若い医師2人の体制になったことが地域の中で知られるようになり、また近隣にマンションが増えて子育て世帯からの需要が高まったことで、私達の代になって程なくしてから患者さんが増えてきました。そんな中で1階の待合室がいっぱいになることもありましたが、まずはスタッフルームなどとして使っていた2階を予防接種や健診の患者さんのために使おうとしたのです。

私達は3階のうち1階だけを診療所として届け出ていたので、2階も診療のために使おうと保健所に相談したところ、手続きが煩雑になることがわかりました。保健所の方によると、当院は1階の入り口の外にエレベーターがあるので、エレベーターがあるホールの部分は診療所の外にある「公道」とみなされてしまい、2階を診療のために使おうとすると、当院とは別の新規の診療所として届け出なくてはいけないとのことでした。そこでアドバイスしていただいたのが、3階も合わせて診療のために活用することです。こうすればビルごと診療所扱いにでき、「1階の拡張」として手続きを簡略化できるということでした。借手も決まらないですし、患者さんも増えていたので、3階も法人として借りた次第です。

——健康教室とみんなのカフェの参加状況はいかがでしょうか。

健康教室の参加人数は全部で25人ほどで、内訳としてはママ&ベビーエクササイズに3、4組、キッズ体育教室に13人、ロコモティブ・シンドローム改善教室に6人です。みんなのカフェも25人くらいで、参加者は当院の患者さんなどご高齢の方が中心ですが、地域の子どもも参加者にお茶を出したり将棋の相手をしてもらったりするなどして運営を手伝ってくれています。

健康教室とみんなのカフェの運営は当院のスタッフと10人のボランティアで行っていて、事務の一人がマネージャーとして指揮を執ってくれています。例えばみんなのカフェの場合、同じ時間帯にクリニックとしては乳児健診を行っています。健診にはそんなに人手がいらないので、余裕のある人をあてがう、といった具合です。

みんなのカフェの方は患者さんが友達を連れて雑談に花を咲かせ、知らない人同士だった方々が笑顔で会話を交わす場面も見られるようになってきました。「これが楽しみなのよ」と話してくれる人もいて、やって良かったなと思いますね。

◆ 田那村雅子（たなむら まさこ）氏

1994年に東京慈恵会医科大学を卒業後、東京慈恵会医科大学附属病院に勤務。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の研修で難民キャンプでの診療も経験。また社会学に興味を持ち、早稲田大学社会科学部に学士編入・卒業。2000年から夫の両親が開設した「田那村内科小児科医院」の診療に加わり、現在は副院長として勤務。「何でも相談に乗る身近な家庭医」がモットー。

取材・文＝医療ライター 庄部勇太

記事検索

ニュース・医療維新を検索

